三宅鉦一による智力測定法

○鈴木朋子¹

(¹ 横浜国立大学大学院教育学研究科)

キーワード: 知能検査, 心理学史, 三宅鉦一

Intelligence test developed by Koichi Miyake

Tomoko SUZUKI¹

(¹ Graduate School of Education, Yokohama National Univ.)

Key words: Intelligence test, history of psychology, Koichi Miyake

目 的

1905 年に, フランスのビネ(Binet, A. 1857-1911)とシモン(Simon, T. 1873-1961)が開発した知能検査は, 知能を実用に即して総合的に捉えた画期的な検査として各国で改訂された。日本でも, 1908 (明治 41) 年に医学者三宅鉦一がビネ式知能検査を紹介し, 改変した検査を「智力測定法」として発表した。本発表では, 三宅の生涯と業績を紹介した上で, 三宅による「智力測定法」の特徴を述べ, 知能検査史における「智力測定法」の役割を考察する。

三宅鉦一の生涯と業績

三宅は代々医師の家系の出で, 父親は東京帝国大学医学部内科講座初代教授の三宅秀である。三宅は, 1876 年 (明治 9 年) 東京府に出生, 1901 年 (明治 34 年) に東京帝国大学医科大学を卒業後, 同大学精神病学講座の助手, 東京府巣鴨病院の委員嘱託を兼務した。1904 年 (明治 37 年), 私費で海外へ留学し, オーストリアのウィーン大学オーベルシュタイネル(Obersteiner, H. 1847-1922)のもとで中枢神経の組織学的研究を行った。その後, ドイツのミュンヘン大学クレペリン(Kraepelin, E. 1856-1926)のもとで臨床講習会に参加し, 精神医学を学んだ。ウィーンでは, フロイト(Freud, S. 1856-1939)から, 最初の日本人聴講生として催眠の講義を受けた。帰国後, 東京帝国大学医科大学講師嘱託を経て, 1909 (明治 42) 年に医学博士を取得し, 東京帝国大学助教授, 東京府巣鴨病院副院長を兼務した。1925 (大正 14) 年, 東京帝国大学医学部教授, 東京府立松沢病院院長に着任した。1935 (昭和 11) 年に大学を定年退官した後, 医学部附属脳研究室主任となった。1954 (昭和 29) 年, 78 歳にて逝去した。

三宅の研究分野, 業績は非常に幅広い。三宅は精神病学を広く指導し, 精神病患者の看護治療の改善を進めると共に, 脳の組織学的研究, 特殊教育, 犯罪精神病学の研究を発展させた。精神衛生に関する社会教育, 社会事業, 貧困患者の救済, 精神病院の施設改善に尽力した人物としても知られている。

智力測定法について

1904 年 (明治 37) から 3 年間のヨーロッパ留学時に, 三宅は, ビネ, ドイツの精神科医ゾンメル(Sommer, R. 1864-1937), エビングハウス(Ebbinghaus, E. 1850-1909)らの研究を見る機会に恵まれた。帰国後, 日本版知能検査の考案を医局員池田隆徳に持ちかけた。三宅が文献を集め, 池田が知的障害者や普通児童に検査を行って作成した検査が, 医学中央雑誌第 6 巻第 1 号〜第 3 号に掲載された, 「智力測定法」である(金子, 1988)。

「智力測定法」では, 先行研究の紹介の後に, 「余等ノ用フル智力測定法」として, 三宅・池田が用いた 28 項目の検査が示されている。この検査は, チーヘン(Ziehen, T. 1862-1950)による小児精神病患者の精神状態検査法雛形(Zichen, 1907)をも

とに, ビネ(Binet & Simon, 1905)やエビングハウス(Ebbinghaus, 1897)らの検査項目を追加したものである。項目内容を検討すると, 問題 1「児童の目の前でデندن太鼓を動かすと, 之に注意するかどうか」, 問題 2「児童の手に物品を与えると之を握るかどうか」等の問題は, ビネ式知能検査 1905 年版の問題と同内容である。また, 問題 24「計算 暗算 $2+3=$, $\dots$ $91 \div 13=$ 」, 問題 25「地理 歴史 日本の大都会の名称十を問ふ」は, チーヘンが用いた問題である。他には, 知識問題や教育で得られた知識を問う項目が見られる(三宅, 1908b)。

続いて論文では, 「普通児ニ於ケル検査ノ数例」として 2 歳〜15 歳の 6 事例が紹介され, 普通児の標準回答が具体的に示されている。さらに「精神發育制止者(白痴, 痴愚, 愚鈍者)ノ智力測定」として 13 名(白痴者 5 名, 痴愚者 2 名, 精神病的兆候のない累犯者 1 名, 教育のない生理的愚鈍 1 名, 感化院大院中の不良少年 1 名, 智能測定により後天性痴呆と判明したもの 3 名)の臨床例が紹介されている(三宅, 1908c)。

「智力測定法」の発表後, 三宅と池田は, 犯罪少年保護学校の収容児と, 滝野川学園の生徒を対象に検査を実施した(金子, 1988)。また, 外来患者の診療の際には, 必ず検査を実施するよう三宅が医局員を指導していたという記録もある(安田生命社会事業団, 1969)。教育者や保護者らが参加した夏季講習会でも検査が紹介され, その講演内容をまとめた『通俗病的児童心理講話』(三宅, 1910)では, 「智力測定法」と臨床例 5 例を論文から抜粋し再掲している。同書籍では, 附録として, 1908 年版のビネ式知能検査の和訳を掲載している。

しかしその後, 三宅は「智力測定法」の紹介や改訂は行わなかった。1927 (昭和 2) 年に出版された『精神測定法』では, ビネ式知能検査についてまとめられているが, 主に久保良英による知能検査の紹介にとどまる。

考 察

三宅は, ビネ式知能検査を日本で初めて紹介した人物として評価を受けてきた。しかし, チーヘン, エビングハウス等の項目を追加して日本独自の「智力測定法」を試作し, 医療現場で使用し, 知能検査の有用性を普及させたことについても高く評価される必要があると考えられる。

引用文献

- 安田生命社会事業団編 1969 日本の児童相談: 明治・大正から昭和へ 川島書店
金子準二著, 1988, 三宅鉦一博士事績: 伝記・三宅鉦一, 大空社
三宅鉦一・池田隆徳 1908b 智力測定法(其二) 医学中央雑誌, 6(2), 26-38
三宅鉦一・池田隆徳 1908c 智力測定法(其三) 医学中央雑誌, 6(3), 12-28
三宅鉦一 1927 精神測定法 吐鳳堂書店